

論文の和文要旨

論文題目	韓国人留学生のキャリア形成における役割意識の変容 —ライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチの枠組みから—
氏名	李奎台
<p>日本で学ぶ留学生数は、年々増加している。そして日本政府や企業により、留学を終えた留学生を高度人材として受け入れるための下地は、整えられているように見える。しかし、日本で就職することを希望する留学生の3割しか、就職できていないという現状がある。留学生が教育機関を卒業し、就職するためには、企業側が期待している「労働人としての価値観」を理解するだけでなく、それ以外の役割（子供・学生・市民など）に関する価値観を理解することも、必要であると考えられる。しかし、教育機関で行われるキャリア教育は基本的に、どのように学生から労働者になるかに焦点を当てているため、労働人以外の役割の視点が欠けている。そのような問題意識から出発した本研究の研究目的は、留学生がキャリア形成においてどのような役割意識を持っており、それがどのように教育機関卒業後の進路決定に影響しているのか、明らかにすることである。それを明らかにすることで、教育機関が留学生に対してどのような支援ができるのか、提言する。研究目的に従い、以下の三つの研究設問を立てた。</p> <ol style="list-style-type: none">① 留学生はキャリア形成においてどのような役割意識を持っているのか。② 留学生が留学前から大学を卒業するまでに持つキャリア形成における役割意識はどのように変容し、どのような要因に影響されているのか。③ それぞれの時期（留学前と教育機関を修了する時期）に下したキャリア決定は、どのようなキャリア形成における役割意識の下でなされたのか。	

なお、本研究における「キャリア」は、「人生を通して、ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続」という Super (1980) の定義に従う。そして、本研究における「役割意識」は、Super (1980) を参考にし、「子供、学生、労働者、市民、余暇を過ごす者など、留学生個人が持っている複数の役割に対する価値観」と定義づける。

第1章では、上記の目的を立てた背景や問題提起を述べた後、本研究におけるキャリア及び役割意識を定義した。そして研究目的と研究設問を示し、研究全体の構成図を提示した。

第2章では、先行研究を整理した上でその問題点を示し、最後に改めて本研究の特徴をまとめた。本研究は、留学生のキャリア形成における役割意識に注目しているが、先行研究には、役割意識という用語を用いる研究は少なく、価値観という用語を用いている研究がほとんどである。留学生の価値観は、適応や変容、社会化というキーワードとともに、多く分析されてきた。本章では異文化適応の観点と発達心理の観点から分析されてきた価値観に関する先行研究を、異文化適応と発達心理の観点ごとに整理した。その後、先行研究の問題点を整理し、先行研究の問題点をどのように補うのかを含めて本研究の特徴を提示した。具体的に、留学生のキャリア形成における研究として、異文化と発達という両方の観点を取り入れていること、留学生個人の役割意識とその変容を扱うために、研究方法論として質的縦断研究を採用していること、正確に自分の心情や経験が表現できる言語(母語)でのインタビューが実施されたこと、という3つの特徴を示した。

第3章では、本研究の分析観点として、Super (1980) のキャリア発達に関するライフ・スパン/ライフ・スペース理論的アプローチ (a life-span, life-space approach to career development) について詳細に提示した。Super (1980) は、キャリアを「人生を通して、ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続」と定義している。そして、職業選択も人生における一度きりのイベントではなく、生涯にわたるプロセスであると捉え、変化する自分と状況の中で、人と職業のマッチングの過程は決して完全には達成されず、断念と統合の過程こそキャリアであると主張している。そして、キャリア自己概念 (career self-concept) を発達させ、実現していくプロセスをキャリア発達 (career development) と呼び、キャリア発達に関するライフ・スパン/ライ

フ・スペース理論的アプローチを提唱した。この理論の4つの鍵概念は、キャリア自己概念、職業適合性 (vocational fitness)、ライフ・スパン (life-span)、ライフ・スペース (life-space) であり、それについて詳しく説明した。

第4章では、調査方法及び分析方法について述べた。調査方法については、そのインタビューの手順と調査対象者について記述した。インタビューの方法は深層面接法であり、留学を準備していた時期から現在に至るまでの出来事や対人関係を自由に語ってもらった。インタビューは、全て録音し、文字化した。協力者6名は、全員日本の教育機関の最終学年に在学している韓国人留学生 (全員20代、女性4と男性2人) である。彼らが就職活動をしていた時期からインタビューを開始し、進路を決めた時まで1年にかけて縦断的に調査した。

分析方法については、大谷 (2011) の Steps for Coding and Theorization (以下、SCAT) という質的分析手法を用いて分析した。その手順は、4段階のコーディングをした後、全体の文脈を考慮し、インタビュー内容に対するストーリーラインを記入し、そこから理論を記述する分析手法である。第3章に提示した Super (1980) によるライフ・スパン/ライフ・スペース理論的アプローチの枠組みを分析観点とし、SCATを用いて質的に分析及び考察した。

第5章では、5.1節から5.6節にかけて6名の韓国人留学生の分析結果と考察を詳細に提示した。その後、5.7節で上記に示した3つの研究設問に答えるかたちでまとめながら、さらに深めた。

研究設問の一つ目、「留学生はキャリア形成においてどのような役割意識を持っているのか。」について分析した結果、留学生が留学前に持っていた役割意識としては、子供・学生・市民・労働者・余暇を過ごす者・宗教人 (その他) であり、留学後に持つようになったと考えられた役割意識としては、余暇を過ごす者、労働者、市民、家庭人、外国人、成人、宗教人であることが明らかになった。日本留学前は子供と学生という二つの役割意識を持って生活しており、来日後、異国での勉学や友達、恋人のような新しい対人関係形成を通じて個々人によって異なる役割意識を持つようになったと解釈できた。

研究設問の二つ目の「留学生が留学前から大学を卒業するまでに持つキャリア形成における役割意識はどのように変容し、どのような要因に影響されているのか。」について分析した結果、キャリア形成に関する役割意識の変容とし

て、留学前から持っていた役割意識が変容する場合と、新しい役割意識を持つようになる場合が見られた。新しい役割意識を持つようになったきっかけとしては、立場及び環境が変化すること、将来の自らの姿を想像すること、予想外の危機と遭遇すること、が挙げられた。

研究設問の三つ目の「それぞれの時期（留学前と教育機関を修了する時期）に下したキャリア決定は、どのようなキャリア形成における役割意識の下でなされたのか。」については、6名の留学生在が来日する前に下した進路決定は、「日本留学」であり、日本留学が終わる時期に下した進路決定は、「韓国で就職」、「日本で就職」、「韓国で進学」、「日本で進学」という4つであった。留学前は子供・学生・労働者としての役割意識の下でキャリア決定（「日本留学」）が下されており、両親や先生の意見がその決定に大きく影響していた。留学後は、複数の役割意識を持って主体的にキャリア決定（「韓国で就職」、「日本で就職」、「韓国で進学」、「日本で進学」）を下していく様子が見られた。

第6章では、分析の結果に基づき、本研究の意義として以下の5つを挙げた。まず、研究枠組みとしてキャリア発達に関するライフ・スパン/ライフ・スペース理論的アプローチを用いることで、複数の役割及びそれらの変容を同時に分析対象としたことである。次に、収集が困難であり、貴重な縦断的データを分析対象としたことである。三つ目は、研究者と調査対象者の母語でインタビューを行ったことである。四つ目は深層面接という質的調査方法及び、SCAT という質的分析手法を用いたことで、従来量的方法で分析されることが多かったことを、厚く記述することができたことである。そして五つ目に、役割の変化がないときのキャリア決定（日本留学決定）を下すときは、他者（両親や先生）の意見に大きく影響されるが、役割の変化があるときのキャリア決定（大学卒業後の進路決定）を下すときは、他者より、自分の意見（意思）に従って、決定することが明らかになった。また、新しい役割意識と既存の役割意識との関係や、経済的状況（両親の支援）、制度的状況（ビザ取得）を考え合わせた結果として、個人の中の諸役割の優先順位に、変化が生じていたことが記述できたことも、本研究の大きな意義である。

最後に留学生的のキャリア支援へどのような提言ができるか、本研究の限界及び今後の課題を述べることで、これからの研究の方向性を示し、本論文を終えた。